

社会の一員として意思決定する生徒を育成する社会科の授業

I はじめに

グローバル化が進む現代社会においては、政治、経済、環境など、様々な分野において、国境をこえたつながりがうまれるため、地理的条件や社会的条件の異なる人々が協働しながら様々な問題を解決していかなければならない。このような社会の背景を基に、2021年度から全面実施されている学習指導要領において、中学校社会科は「社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎」を育成することが目標として掲げられている。また、課題を追究したり解決したりする上で重要な資質・能力である「思考力・判断力・表現力等」に関しては、「社会的事象を多面的・多角的に考察する力」「課題の解決に向けて選択・判断する力」「説明したり、議論したりする力」の育成が必要とされている。そして、これらを効果的に育成するために「知識及び技能」の習得・活用が不可欠であるとしている。したがって、これからの中学校社会科教育においては、課題の解決に向けて、他者に自分の考えを説明したり他者と議論したりするを通して、社会を構成する人々が置かれている様々な立場を理解し、それらを尊重しつつ複数の解決方法の中からより望ましい解決策を選択・判断していくことができる生徒、すなわち社会の一員として意思決定する生徒の育成が必要だと考えられる。

以上のことから、研究主題を「社会の一員として意思決定する生徒を育成する社会科の授業」と設定して、研究を進めることにした。

II 研究の概要

1 社会科が目指す生徒像

本校社会科では、次のような生徒を育てたいと考えている。

社会の一員として意思決定する生徒

2 育みたい資質・能力

社会科で目指す生徒を育てるためには、次の資質・能力を育む必要があると考える。

概念的知識を踏まえて意思決定する力

「概念的知識」とは、原因と結果が明示され、個別事象を超えた法則性を示す知識のことであり、転移が可能な知識でもある。つまり、他の時代や他の地域にも置き換えて考えることができ、社会を構成する人々が共通理解できる知識であると言える。したがって、概念的知識を踏まえて意思決定することができれば、課題やその解決方法を多面的・多角的に捉えた上で、他者が納得できるより望ましい解決策を選択・判断できるようになり、社会の一員として意思決定する生徒につながると考える。

3 資質・能力を育むための手立て

(1) 単元構成の工夫

拡散的思考と収束的思考を適切に働かせながら、段階的に資質・能力を育てていくために、単元を三つの場で構成する。拡散的思考を働かせる場として、「考えをもつ場」と「考えを広げる場」を、収束的思考を働かせる場として、「考えを創り上げる場」を設定する。

「考えをもつ場」は、生徒が社会的事象に触れたときに生じた疑問や生徒たちが将来直面するであろう諸問題を踏まえた追究課題を教師が提示し、それについて初めて意思決定する場であり、切り口を比較した上で意思決定することをねらいとする。教師は、追究課題の背景となる時代の特色や地域的特色、社会の状況を捉えさせた上で、追究課題の解決方法を考えさせ、それらを分類したものを切り口として複数設定する。そして、切り口を比較させた上で意思決定させ、意思決定した過程を「ステップチャート」(後述)(資料1)に記述させる。

「考えを広げる場」は、追究課題に関わる社会的事象を多面的・多角的に考察する場であり、一つの立場に立ち、根拠を基に切り口を比較した上で意思決定することをねらいとする。多面的に考察させるために、資料を基に切り口の良い点、問題点を整理させた上で、切り口を比較させる。また、多角的に考察させるために、追究課題に関わる人々の立場を無作為に生徒たちに振り分け、この場の最後に行う「個々の討論」まで、振り分けられた立場に基づいて意思決定させていく。切り口についての学習後、振り分けられた立場に立って根拠を基に切り口を比較した上で意思決定させ、その過程を「ステップチャート」に記述させる。その後、振り分けられた立場が異なる生徒が混在する小集団による「個々の討論」を設定する。「個々の討論」では、「ステップチャート」を使って、意思決定した過程を発表させ、その内容について議論させる。その後、議論の中で出された意見を基にこれまでの過程を振り返らせた上で、改めて意思決定させ、「ステップチャート」を修正させる。

「考えを創り上げる場」は、追究課題について議論し、それを踏まえて最終的に意思決定する場である。この場では、複数の立場に立ち、根拠を基に切り口を比較した上で意思決定すること、概念的知識を踏まえて意思決定することをねらいとする。この場では二つの討論を行う。まず、「立場の討論」では、「個々の討論」と同様に小集団をつくらせ、複数の立場の意見を踏まえて、どの切り口が追究課題の解決策として最もふさわしいかを議論させる。その後、帰納的に考えられるよう教師がこれまでの学習内容や本時に議論したことを俯瞰させるような発問をし、知識の再構成を図ることで、概念的知識を導き出させる。「集団の討論」では、「立場の討論」で議論したことを基に、概念的知識を踏まえて、どの切り口が追究課題の解決策として最もふさわしいかを学級全体で議論させる。最後に、他の時代や地域、事例などにも活用できることはないか考えさせ、概念的知識を踏まえさせて追究課題について意思決定させ、その過程を「ステップチャート」に記述させる。そして、「ステップチャート」に記述した意思決定の過程を「単元レポート」(資料2)として文章で記述させる^{※1)}。

このように構成された単元を繰り返し学習することで、生徒たちが将来、様々な問題に直面したときに、社会の一員として意思決定することができるようになると思う。

(2) 「モニタリング」と「リフレクション・モニタリング」

メタ認知を促進させ、拡散的思考と収束的思考を適切に働かせながら追究課題を解決していくため、また、深い理解を伴った知識を習得させるため、「モニタリング」と「リフレクション・モニタリング」を以下のように単元に位置付ける。

「モニタリング」については、思考ツールを活用した「ステップチャート」に取り組ませる場面に位置付ける。「思考ツールは、子供に考える方法を示し、考える面白さを伝え、考えることへの関心を高め、考えを人に伝えることをサポートする。そして、同じ思考ツールを使っていることが、互いの考えをわかり合うためのプラットフォームになる。さらには、自分がどのように考えたのかを振り返ってメタ認知するのを助けてくれる」¹⁾という理論に基づき、思考ツールを使わせることでメタ認知を促進させやすくなるを考える。また、「ステップチャート」を用いることは、「ステップチャート」が自分の考えを構造化したり、順序立てたりするのに適していると考えている。このように「ステップチャート」にまとめさせ、その記述内容を自己評価^{注2)}させた上で、「個々の討論」での意見交流や教師からの評価も参考にしながら記述内容について見直しをさせることで、課題の解決に向けて適切な思考方法を働かせたり（「拡散的思考中のモニタリング①②③」《以下「拡M①②③」》）、「収束的思考中のモニタリング①」《以下「収M①」》）、「必要な知識を習得させたり（「モニタリング①②③」《以下「M①②③」》）していく。

「リフレクション・モニタリング」については、「立場の討論」の最後に行う概念的知識を導き出させる場面と「単元レポート」に取り組ませる場面に位置づける。「立場の討論」の最後に、帰納的に考えさせるために教師がこれまでの学習内容や本時に議論したことを俯瞰させる発問をし、知識の再構成を図ることで、概念的知識を導き出させる。その際、導き出した概念的知識が単元で学習した社会的事象とどのように結び付くのかを考えさせることで、学習した内容について、既存の知識の関連付けが行われ、概念的知識を学習した単元において活用できるようになり、概念的知識の習得、すなわち深い理解を伴った知識の習得につながる（「リフレクション・モニタリング①」《以下「RM①」》）。そして、「単元レポート」に取り組ませることで、これまでの学習過程や思考方法について振り返らせ、どのようにして追究課題を解決してきたかについてメタ認知を促進させ拡散的思考と収束的思考の有効性を認識させる（「拡散・収束的思考による課題解決後のリフレクション・モニタリング①」《以下「拡・収RM①」》）。また、習得した概念的知識を基に、他の時代や地域、事例などにも活用できることはないかについて振り返らせることで、メタ認知を促進させ、概念的知識をより精緻化させていく。（「リフレクション・モニタリング②」《以下「RM②」》）。

場	考えをもつ場	考えを広げる場			考えを創り上げる場						
主な学習活動	追究課題の提示	「ステップチャート」①	振り分けられた立場で切り口の学習	「ステップチャート」②	個々の討論	「ステップチャート」②の修正	立場の討論	概念的知識を導き出す	集団の討論	「ステップチャート」③	「単元レポート」
思考	拡散的思考					収束的思考					
課題解決	拡散、収束的思考を活用した追究課題の解決										
「モニタリング」「リフレクション・モニタリング」		拡M①		拡M②		拡M③				収M①	拡・収RM①
				M①		M②		RM①		M③	RM②
課題解決	既存の知識を活用した追究課題の解決						概念的知識を活用した追究課題の解決				
目標	切り口を比較した上で意思決定することができる。	一つの立場に立って根拠を基に切り口を比較した上で意思決定することができる。				複数の立場に立って根拠を基に切り口を比較した上で意思決定することができる。			概念的知識を踏まえて意思決定することができる。		

【二つの手立てを基にした単元構成図】

4 資質・能力が育まれたかの評価について

社会科では、「単元レポート」の記述内容によって資質・能力が育まれたかを評価する。また、単元構成の工夫と「モニタリング」「リフレクション・モニタリング」という二つの手立ての有効性を捉えるために、「ステップチャート」や「単元レポート」の記述内容による変容を見取っていく。

5 研究の経緯

1年次では、拡散的思考と収束的思考を適切に働かせる場を設定したことで、追究課題に関わる社会的事象を多面的・多角的に考察させ、段階的に意思決定を繰り返させた。また、「M、拡M、収M」をさせることで思考過程や根拠、解釈の理解度を振り返らせながら意思決定させた。これらの手立てを繰り返し行わせながら、最終的に概念的知識を踏まえて意思決定させたことで、育みたい資質・能力の育成につながった。しかし、「RM①」について、概念的知識を導き出す場面や、転移について考えさせる場面で発問の意図が伝わらなかったり、十分に考えさせる時間を確保できなかったりして、適切な思考を働かせることができない場面があった。また、「立場の討論」と「集団の討論」の内容の区別が明確でなかった。

そこで、2年次では、「RM①」を行わせる場面の位置付けを変更した。「立場の討論」において、深い理解を伴った知識を習得させるための「RM①」を行わせ、「集団の討論」において、学級全体で概念的知識を踏まえて議論させるようにした。さらに、他の時代や地域、事例などにも活用できることはないか考えさせ、概念的知識を踏まえて意思決定させた。また、「RM①」の方法の改善についても、概念的知識の導き出させ方について見直した。具体的には、教師がその単元で習得させたい概念的知識の言葉になるように導き出させていた方法から、概念が同じであれば生徒たちが議論の中から考えた概念的知識の言葉を取り入れて導き出させる方法に改善した。こうしたことで、「立場の討論」において、十分に議論をした上で、概念的知識を導き出させることができ、深い理解を伴った知識の習得につながった。さらに、「集団の討論」において概念的知識を踏まえて議論させたことで、概念的知識と単元で学習した社会的事象を結び付けさせることができたと考えられる。よって、これらの議論を基に「ステップチャート」や「単元レポート」において、概念的知識を踏まえて意思決定させたことで、育みたい資質・能力の育成につながった。しかし、課題解決後に記述させた「単元レポート」において、拡散的思考や収束的思考の有効性を十分に認識していなかったり、習得した概念的知識の活用について他の時代や地域、事例などに置き換えて考えることができなかったりした生徒も見られた。

そこで、3年次では、2年次の課題を受けて、課題解決後の「拡・収RM①、RM②」において、生徒が拡散的思考や収束的思考の有効性を認識しやすくなるように、自己評価の内容を評価の項目ごとに数値化したり、具体的な選択肢を与えたりするなどして改善した。その結果、多くの生徒が単元で学習したことを振り返って内容を把握した上で、拡散的思考や収束的思考の有効性を認識できるようになり、さらに、概念的知識を他の時代や地域、事例などに置き換えて考えることができた生徒も多く見られるようになった。

Ⅲ おわりに

社会の一員として意思決定する生徒を育てるために、社会科では、「概念的知識を踏まえて意思決定する力」が必要であると考え、実践に取り組んできた。

拡散的思考を働かせる場として「考えをもつ場」と「考えを広げる場」を、収束的思考を働かせる場として「考えを創り上げる場」を設定した。それぞれの場で、適切に切り口を比較したり、資料を読み取ったりすることができたかなどの視点から振り返りを行い、自己評価させたことで、単元で学習した内容を把握した上で、拡散的思考や収束的思考を適切に働かせることができるようになった。

また、深い理解を伴った知識を習得させるために、「RM①」「RM②」を設定した。2年次以降は、「RM①」を行わせる場面の位置付けを変更し、「立場の討論」において、深い理解を伴った知識を習得させるための「RM①」を行わせ、「集団の討論」において、学級全体で概念的知識を踏まえて議論させるようにした。さらに、概念的知識を生徒たちが議論の中から考えた言葉を取り入れて導き出させるようにしたことで、十分に議論をした上で概念的知識を導き出させ、習得させることができた。また、「RM②」を行わせる場面において、質問や自己評価の方法をより分かりやすく具体的な形に改善することで、他の時代や地域、事例などに活用できるようになり、概念的知識をより精緻なものにすることができた。

以上のことから、本研究において、概念的知識を踏まえて意思決定することで、課題やその解決方法を多面的・多角的に捉えた上で、他者が納得できるより望ましい解決策を選択・判断できるようになり、社会の一員として意思決定する生徒につながるということが実証されたと考える。

注1) 公民的分野では、切り口を基に概念的知識を踏まえていくつかの解決方法を学級で吟味し、合意形成を図ることで解決策を考えさせ、意思決定させていく。

注2) 考えをもつ場の「ステップチャート」では、「切り口を比較して結論を出せたか」、考えを広げる場の「ステップチャート」では、「切り口を比較して結論を出せたか」「資料を正しく読み取れたか」「解釈に飛躍はないか」「振り分けられた立場に立っているか」、考えを創り上げる場の「ステップチャート」では、「切り口を比較して結論を出せたか」「資料は正しく読み取れたか」「解釈に飛躍はないか」「複数の立場に立っているか」「概念的知識を踏まえているか」について自己評価する。

引用文献

- 1) 田村学・黒上晴夫・三田大樹著『「深い学び」で生かす思考ツール』小学館、2017年、2ページ

参考文献

岩田一彦『社会科固有の授業理論 30の提言～総合的学習との関係を明確にする視点～』明治図書出版、2001年

北俊夫『「思考力・判断力・表現力」を鍛える新社会科の指導と評価 見方・考え方を身につける授業ナビゲート』明治図書出版、2017年

国立教育政策研究所『国研ライブラリー 資質・能力 理論編』東洋館出版社、2016年

『社会科教育』編集部編 『平成29年度版 学習指導要領改訂のポイント 小学校・中学校 社会』明治図書出版、2017年

田村学・黒上晴夫著、滋賀大学教育学部附属中学校編『こうすれば考える力がつく！中学校思考ツール』小学館、2014年

森分孝治・片山宗二編『社会科重要用語300の基礎知識』明治図書出版、2000年

文部科学省『中学校学習指導要領 解説－社会編－』東洋館出版社、2018年

資料1-1 「ステップチャート【考えをもつ場】」

第3学年 社会科学学習プリント 「二度の世界大戦と日本」
 タグチャート【考えをもつ場】 3年 組 番氏名()

追究課題:日本が日中・日韓戦争に向かうことになった最も大きな要因は何か。
 切り口A「経済の悪化」、切り口B「軍の台頭」、切り口C「国際関係の悪化」
 【考えをもつ場の目標】 切り口を比較した上で意思決定することができる。

私が追究課題に最もふさわしいと考えるのは、切り口【C】です。

×:切り口「A」を選ばなかった理由
 経済が悪化すれば、戦争に必要な資金や武器を調達しやすくなる。経済が好転すれば、戦争が起きにくくなる。また、P211で、軍部による内閣が倒れた事例がある。経済の悪化は国民の反感を買う。よって、政府は国内の対応を強化する。戦争が政府にとって不利になると思っている。よって、国民の反感を買う必要はない。日本経済は回復している。よって、切り口「A」を選ばなかった理由

×:切り口「B」を選ばなかった理由
 日本が露土に勝った。軍事力の増進。よって、費用は増えている。よって、切り口「B」を選ばなかった理由

○:切り口「C」を選んだ理由
 P194④から、支那国境を認め、日本軍に推進を勧める。よって、42村に侵襲した。よって、政府は、国際社会に圧力をかけ、国際連盟に訴える。よって、国際社会に訴える。よって、日本は国際社会の立場は一歩に陥り、他国からの圧力が強くなる。よって、切り口「C」を選んだ理由

○結論(切り口の差)
 切り口Aでは、経済の悪化が日本に不利な状況に追い付いたため戦争の主要原因ではない。切り口Bでは、軍事力の増進が戦争の主要原因ではない。よって、切り口Cは、国際連盟に訴える。よって、国際社会に訴える。よって、日本は国際社会の立場は一歩に陥り、他国からの圧力が強くなる。よって、切り口「C」です。

自己評価をしよう	【O△×】	【理由】
①比較 切り口を比較して結論を出せたか	○	A・B・Cそれぞれの切り口を比較し、経済の悪化は、
②結論 資料は正しく読み取れたか	○	
③解釈 解釈に間違いはないか	○	
④立場 割り分けられた立場に立っているか	○	
⑤備考 追加の知識を補足しているか		

資料1-2 「ステップチャート【考えを広げる場】」

第3学年 社会科学学習プリント 「二度の世界大戦と日本」
 タグチャート【考えを広げる場】 3年 組 番氏名()

【考えを広げる場の目標】一つの立場に立って根拠を基に切り口を比較した上で意思決定することができる。
 割り分けられた立場【政府】

私が追究課題に最もふさわしいと考えるのは、切り口【C】です。

×:切り口「A」を選ばなかった理由
 根拠【②-6】から 満州国が日本の属国となり、資源の供給が確保された。根拠【②-8】から 主要物資の輸出額が増加した。根拠【政府】として、他国に日本の存在を認め、工業地帯の増設を認め、農産物の増産を認め、経済が好転した。よって、戦争が起きにくくなる。よって、切り口「A」を選ばなかった理由

×:切り口「B」を選ばなかった理由
 根拠【P194】から 恐慌からの脱却、生産力の増進。よって、費用は増えている。よって、切り口「B」を選ばなかった理由

○:切り口「C」を選んだ理由
 根拠【P211】から 日本が中国に進出し、南支那に侵襲した。よって、政府は、国際連盟に訴える。よって、国際社会に訴える。よって、日本は国際社会の立場は一歩に陥り、他国からの圧力が強くなる。よって、切り口「C」です。

○結論(切り口の差)
 切り口Aでは、経済の悪化が日本に不利な状況に追い付いたため戦争の主要原因ではない。切り口Bでは、軍事力の増進が戦争の主要原因ではない。よって、切り口Cは、国際連盟に訴える。よって、国際社会に訴える。よって、日本は国際社会の立場は一歩に陥り、他国からの圧力が強くなる。よって、切り口「C」です。

自己評価をしよう	【O△×】	【理由】
①比較 切り口を比較して結論を出せたか	○	A・B・Cそれぞれの切り口を比較し、経済の悪化は、
②結論 資料は正しく読み取れたか	○	
③解釈 解釈に間違いはないか	○	
④立場 割り分けられた立場に立っているか	○	
⑤備考 追加の知識を補足しているか		

資料1-3 「ステップチャート【考えを広げる場】」

「個々の討論」

① ステップチャートとロイノートを使って、互いの意思決定について小集団で話し合おう。
 → 意見を出し際は、自己評価の項目①~④を意図しよう。
 ② 仲間からもらった意見を基に、自分の意思決定を振り返ろう。
 (○番について、××と書かれたから、○○と直す。××と書かれたけれど、○○だから直さない。)

〈 ___ さんからもらった意見の内容〉	〈自分の考え〉
切り口C。反対派が強いから、かたがた。→一時的なことだから戦争はつづけて(もうの?)	資源不足が、非推奨が当選した。よって、反対派は手あまた。多いた。(当時、他国からの圧力があつた。よって、反対派は手あまた。多いた。よって、一時的なことで、戦争はつづけて(もうの?)
資源が少なくなったから、どうしように戦争はつづけたのかを具体的に(切ったか)戦争はつづけたのか	TX1から、資源を確保するために、戦争を繰り返す。よって、反対派は手あまた。多いた。よって、一時的なことで、戦争はつづけて(もうの?)
___ さんからもらった意見の内容	〈自分の考え〉

「個々の討論」を終えて、(仲間の意見以外で)自分自身が直すよいと考えたところ
 「軍需産業が活発化し、経済が成長した。(切り口B)という点で、なぜ経済が良かったから戦争はつづけたのか明確に言えないと思った。」

→ 直すところがあれば、左のステップチャート【考えを広げる場】を赤で修正しよう。

修正後の自己評価をしよう	【O△×】	【理由】
①比較 切り口を比較して結論を出せたか	○	左側は経済学、右側は歴史学。よって、切り口Cは、
②結論 資料は正しく読み取れたか	○	
③解釈 解釈に間違いはないか	○	
④立場 割り分けられた立場に立っているか	○	
⑤備考 追加の知識を補足しているか		

資料1-4 「ステップチャート【考えを創り上げる場】」

「個々の討論」

① ステップチャートとロイノートを使って、互いの意思決定について小集団で話し合おう。
 → 意見を出し際は、自己評価の項目①~④を意図しよう。
 ② 仲間からもらった意見を基に、自分の意思決定を振り返ろう。
 (○番について、××と書かれたから、○○と直す。××と書かれたけれど、○○だから直さない。)

切り口A「経済の悪化」、切り口B「軍の台頭」、切り口C「国際関係の悪化」

私が追究課題に最もふさわしいと考えるのは、切り口【B】です。

×:切り口「A」を選ばなかった理由
 根拠【②-6】から 満州国が日本の属国となり、資源の供給が確保された。根拠【②-8】から 主要物資の輸出額が増加した。根拠【政府】として、他国に日本の存在を認め、工業地帯の増設を認め、農産物の増産を認め、経済が好転した。よって、戦争が起きにくくなる。よって、切り口「A」を選ばなかった理由

×:切り口「C」を選ばなかった理由
 根拠【P211】から 日本が中国に進出し、南支那に侵襲した。よって、政府は、国際連盟に訴える。よって、国際社会に訴える。よって、日本は国際社会の立場は一歩に陥り、他国からの圧力が強くなる。よって、切り口「C」です。

○:切り口「B」を選んだ理由
 根拠【P211】から 日本が中国に進出し、南支那に侵襲した。よって、政府は、国際連盟に訴える。よって、国際社会に訴える。よって、日本は国際社会の立場は一歩に陥り、他国からの圧力が強くなる。よって、切り口「B」です。

○結論(切り口の差)
 切り口Aでは、経済の悪化が日本に不利な状況に追い付いたため戦争の主要原因ではない。切り口Bでは、軍事力の増進が戦争の主要原因ではない。よって、切り口Cは、国際連盟に訴える。よって、国際社会に訴える。よって、日本は国際社会の立場は一歩に陥り、他国からの圧力が強くなる。よって、切り口「B」です。

自己評価をしよう	【O△×】	【理由】
①比較 切り口を比較して結論を出せたか	○	A・B・Cそれぞれの切り口を比較し、経済の悪化は、
②結論 資料は正しく読み取れたか	○	
③解釈 解釈に間違いはないか	○	
④立場 割り分けられた立場に立っているか	○	
⑤備考 追加の知識を補足しているか		

